

8 Hepatic peribiliary cyst の検討

大田 宏信・丸山 弦
 馬場 康幸・林 俊彦 (済生会新潟第二病院)
 吉田 俊明・上村 朝輝 (消化器内科)
 大橋 優智・坪野 俊広
 石崎 悦郎・酒井 靖夫
 相場 哲朗・川口 正樹 (同 外科)
 遠藤 泰志・石原 法子 (同 病理)
 真船 善朗 (まふね内科クリニック)

【目的】今回我々は臨床上 Hepatic peribiliary cyst (HPBC) と診断した4例を経験したので、その特徴を検討した。

【結果】〔症例1〕73歳, 男性. 無症状であったが, 肝機能障害を認め, また種々画像にて左肝内胆管の拡張と B2B3 分岐部に陰影欠損があり, 肝内胆管癌を強く疑い肝左葉切除を行った. 切除標本は HPBC で連続する嚢胞を拡張肝内胆管ととらえており, また嚢胞による胆管の圧排を腫瘍ととらえていた. 〔症例2〕67歳, 男性. 胆管炎で入院. DIC-CT, MRCP で左右肝管起始部に径 5 mm と 10mm の嚢胞があり, これが胆管を圧排しその後3年間胆管炎を繰り返している. 〔症例3〕アルコール性肝硬変で 1998 年より入退院を繰り返す. 同年3月の CT では異常を認めなかったが, 2000 年7月の CT では肝門部に多数の嚢胞が出現し, 一部肝内胆管を圧排していた. 2 年間で HPBC の形成がみられた稀な症例と思われる. 〔症例4〕アルコール性肝障害および慢性膵炎で 1996 年より受診. CT で門脈左枝周囲に多発嚢胞を認め, 5 年間不変である.

【結語】4 例中 3 例に慢性肝障害を認めた. また 2 例に胆管炎を併発した. その経過に関しては短期間に形成されるものから長期不変のものまで様々であった. 拡張肝内胆管との鑑別には DIC-CT が有用であった.

9 1 cm 以上の総胆管結石症に対する体外衝撃波破碎療法 (ESWL) を主体とした治療成績

中村 厚夫・八木 一芳 (県立吉田病院)
 関根 厚雄 (内科)

【目的】総胆管結石症の治療において, Conflu-

ence Stone をはじめ内視鏡的治療には限界がある. 手術療法においても合併症や年齢で適応とならない症例も認められる. 当科では 1 cm 以上の総胆管結石には主として ESWL を行い, 縮小後内視鏡的処置を行う場合が多い. その治療成績について検討した.

【方法】1991 年12月から 2001 年2月までに総胆管結石症に対し ESWL 療法を行った症例は 98 例. そのうち 1 cm 以上の症例は 93 例 (男性 30 例, 女性 63 例), 年齢 31~103 歳 (平均 74.8 歳, 80 歳以上 42 例 45%), 結石数: 1 個 28 例, 2 個 29 例, 3 個 13 例, 4 個 6 例, 5 個以上 17 例, 結石最大径 10~75 mm (平均 19.6 mm, 20 mm 以上 37 例) であった. 93 例中 26 例は内視鏡的処置や手術不能で他院より紹介された症例であった. 今回の検討では結石を 9 mm 以下とする事を目標として検討した. ESWL 単独で 9 mm 以下となったものを破碎終了群 (A), ESWL 後内視鏡的処置の追加で結石が 9 mm 以下となったものを排石終了群 (B) とし, 最大結石の大きさ, 年齢, 合併症などにより比較検討した.

【成績】(A) は 50 例 (54%), (B) は 85 例 (91%) であった. 内視鏡的処置を行っても 10 mm 以上の結石が残存した 8 例は経過中の合併症で継続できなくなった 4 例や 15 mm 以下で紹介病院に帰院した 3 例, Bilroth II 法 (B II 法) 残胃 1 例であった. 20 mm 以上の結石例は 37 例, (A) は 17 例 (46%), ESWL の平均回数は 1.9 回, (B) は途中で帰院した 3 例と B II 法で内視鏡不能例 1 例を除くと 100% であった. 80 歳以上は 42 例, (A) は 21 例 (50%), ESWL の平均回数 1.9 回, (B) は帰院 2 例と B II 法 1 例と呼吸不全で死亡 1 例の 4 例を除くと 100% であった. 合併症にて手術不能例と他院にて内視鏡的除去不能例は 20 例, (A) は 8 例 (40%), ESWL の平均回数 2.1 回, (B) は帰院 2 例と呼吸不全で死亡 1 例の 3 例を除くと 100% であった.

【結論】巨大結石, 超高齢や合併症で手術不能例などに関しては ESWL 以外に方法がない場合が認められる. 以上のような症例は ESWL と内視鏡的結石除去を組み合わせる方法が最もよい治療法であると考えられた.